

2021 年度事業報告書

2021 年 4 月 1 日から

2022 年 3 月 31 日まで

公益財団法人 森林文化協会

1. <総論>

森林文化協会は「調査・研究」「森づくり・森の支援」「普及啓発」からなる公益目的事業を実施し、森林の保護・活性化を通して、国連が掲げるSDGs（持続可能な開発目標）の推進を後押しした。年報『森林環境』や、『グリーン・パワー』などを通じて森林や地球環境の現状をわかりやすく伝え、理解や関心が広がるように心がけた。

またコロナ禍で集客を伴うイベントは大きく制限されたが、シンポジウムなどの機会をとらえて森林環境保護の重要性を訴えた。

2. <調査・研究>（公1：森林試験研究事業）

〔1〕森林環境研究会

森林文化協会が設置する専門委員会。森林や環境の研究に携わる学者と環境問題に関心を持つジャーナリストで幹事会を構成している。21年度の幹事会は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からオンライン、書面会議等でそれぞれ協会活動への助言を受け、当該年度の研究テーマに沿った調査研究活動を実施した。

<幹事会の構成>

青木謙治・東京大学大学院農学生命科学研究科准教授

一ノ瀬友博・慶應義塾大学環境情報学部 学部長・教授

井上真・早稲田大学人間科学学術院教授、東京大学名誉教授（座長）

鎌田磨人・徳島大学大学院社会産業理工学研究部教授

黒沢大陸・朝日新聞論説委員

酒井章子・京大大学生態学研究センター教授

田中俊徳・九州大学アジア・オセアニア研究教育機構准教授

田中伸彦・東海大学観光学部教授（座長代理）

野上隆生・朝日新聞久留米支局長

則定真利子・東京大学大学院農学生命科学研究科附属アジア生物資源環境研究センター准教授

原田一宏・名古屋大学大学院生命農学研究科教授

〔2〕学術年報事業『森林環境』の編集・発行

『森林環境』は04年から発行を続けている森林環境研究会編著の年報。今回の特集テーマは「森とともにどう生きてきたか」。明治以前の時代に目を向け、人びとが森林とどのように付き合い、そこから得た資源をどのように利用してきたかをみつめた。

環境保全関連の最新的话题を伝えるトレンド・レビューでは「ウッドショックはなぜ起こ

ったか?」「新型コロナウイルスと大学教育」といった今日的な話題を採り上げ、私たちの社会や暮らしに引き寄せて考えた。22年3月、『森林環境2022』として発行するとともに、協会ホームページにPDFを掲載して無料公開した。

3. <森づくり・森の支援> (公2:森林環境保全事業)

〔1〕「つくば万博の森」実験林事業

つくば万博の森は茨城県つくば市にある宝篋山(ほうきょうさん・標高461m)中腹の松枯れして皆伐された約10ヘクタールの国有林で、朝日新聞社の呼びかけで全国約4万2千人から集まった寄付金を基に1985年に約3,000本、86年に約2万7,000本のヒノキを植樹した。その後、協会が維持管理を担い関東森林管理局と2045年まで60年間の分収造林契約を結んでいる。

植樹から36年となった2021年秋には、全体の4分の1にあたる約2.4ヘクタールについて間伐を実施し、森の維持に努めた。万博の森のヒノキは高さ15~18メートル、直径26~32センチメートルで順調に生育している。

宝篋山は首都圏近郊の登山・ハイキングのコースとして人気がある。森林文化協会としても森づくり支援をいっそう進めるため、地元で登山道整備に取り組むNPO法人等と意見交換している。また、地元の市民グループ宝篋山アルペン倶楽部が主催している「宝篋山ハイキング」を、つくば市、同市教育委員会等とともに後援している。21年度は新型コロナウイルスの影響で開催されなかったが、引き続き後援を続ける。

〔2〕国際森林デー「みどりの地球を未来へ」イベント

国連が定めた「国際森林デー」(3月21日)にちなんだ取り組み。21年度行事は新型コロナウイルスの感染拡大があり、中止とした。

〔3〕森林の保全・利用に取り組む団体への支援

①くつきの森の利用・管理支援

「くつきの森」(滋賀県高島市朽木)は現在、地元のNPO法人・麻生里山センターが管理する市有地(約150ヘクタール)で、クヌギなどを主体とした里山林となっている。麻生里山センターは地元の麻生地区をはじめ高島市や支援企業、地元の研究者などと連携して、森林や草原の再生・活用に関するプログラムを展開している。21年度は、活動をホームページや協会メールマガジンで紹介するなど、その企画・運営を支援した。

②上ノ原・入会の森の利用・管理支援

「上ノ原・入会の森」(群馬県みなかみ町)は東京の市民団体・森林塾青水が管理する町有地(約21ヘクタール)であり、ミズナラを主体とした二次林と、ススキ草原からなる。

森林塾青水は地元藤原地区の住民やみなかみ町、支援企業と協力して、旧薪炭林の保全や茅場（ススキ草原）の再生などに関するプログラムを展開している。21年度も、春の野焼きや隣接する夏の防火帯整備、ミズナラ林の遊歩道整備の周知など、引き続き運営に協力した。

4. <普及啓発事業>（公3：森林普及啓発事業）

〔1〕情報発信

①森と人の文化誌『グリーン・パワー』（月刊）の発行

『グリーン・パワー』は1979年創刊の森林文化に関する月刊情報誌。

2022年1月から全面デジタル化のうえ無料公開する形式に改めた。「今月の絵暦」「亜熱帯やんばるの森」「木育とおもちゃ美術館」などの人気コンテンツを中心に、森林や環境に関する最新情報を読者に届けている。

②ホームページによる無料公開

森林への理解を深める普及啓発活動の推進と、若い人に向けての情報発信を強化するため、協会のホームページを積極的に活用して活動報告やイベント募集など情報発信に努めた。また調査研究活動の成果を広く利用してもらうために始めた年報『森林環境』のホームページ上の無料公開を継続した。このほか、希望する会員向けのメールマガジンやフェイスブックなども情報発信に利用した。

③日本の自然写真コンテスト

朝日新聞社、全日本写真連盟による「日本の自然」写真コンテストに森林文化協会賞を設け、活動に積極的に加わってきた。2021年度の森林文化協会賞は、浅野良氏（福島県）の「月夜のささやき」が受賞した。

〔2〕森林研修

①国民参加の森林(もり)づくりシンポジウム

森林文化協会、朝日新聞社、国土緑化推進機構などが主催し林野庁、美しい森林づくり全国推進会議の後援を得て、全国育樹祭の一年前に開催地で行うイベント。2021年は大分県日田市で開催した。木を生かした地域づくりを掲げた基調講演や、スギの活用を広める活動でまちづくりを図る事例などを紹介した。

②森林と健康シンポジウム

森林の癒やし効果などに注目した「森林と健康シンポジウム」を日本森林保健学会、東京農業大学などと協力して学生や市民に情報発信しており、今後も支援を続ける。

③皇居・東御苑野外セミナー

皇居・東御苑の植物や歴史、文化を元宮内庁職員の解説付きで学ぶ森林文化協会主催の野外セミナーを6月と11月に開催予定だったが、新型コロナウイルス感染防止の観点から中止とした。

④東京おもちゃ美術館の「木育サミット」を後援

木育の国内展開としては、東京おもちゃ美術館が主催する「木育サミット」への後援活動がある。木に親しみ、木を生かし、木と共に生きていく「木育」の活動を全国に広めていくことを目的にしたイベントで、『グリーン・パワー』での活動紹介等、引き続き支援していく。

⑤赤沢森林浴

「森林浴」発祥の地、信州「赤沢自然休養林」で1982年から地元の上松町とともに主催している野外セミナー。「赤沢自然休養林」は2006年4月に第1期セラピー基地に認定された。森林の持つ癒しの力を活用する研究が進んでいる。地元の木曽森林管理署やNPO法人の方々のガイド付きで、ヒノキをはじめ、サワラ、ネズコ、アスナロといった針葉樹が中心の森を4時間ほど歩く。21年度は新型コロナウイルス感染症の影響で中止となった。

⑥海外木育ツアー

「木育」をテーマに森の国ドイツを訪ねる「幼児教育研修旅行」が定着し、ヨーロッパ各国に広がってきた。民間の旅行サービス会社と提携したこのツアーは全国の幼稚園・保育園の経営者、先生らを対象に催行しているが、21年度は新型コロナウイルス感染症の影響で中止となった。

⑦森のベースキャンプ

各地の森を訪ね、自然に触れる際の宿泊支援としてJR東日本の滞在型宿泊施設ホテルフォルクローロ、ホテルファミリーオと契約し、協会会員が10%割引料金で利用できるサービスを継続した。

以上